

同級生だった学くんに捧ぐ

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

あ
の
頃
の
松
田
へ

http://park2.wakwak.com/~kiss_co/

中学時代の溜まり場は、屋上の貯水タンクの陰だった。教師たちは、屋上へのドアの南京錠が壊れていることも知らず、俺達がそこを溜まり場にしていることも知らなかった。

俺がセブンスターで、松田がショートホープ、小林がマルボロ、橘がマルボロのメンソールを吸っていた。

「お前、メンソールはヤバイだろ」

「いい加減やめろって。アソコが駄目になるって話マジだって」

と、いつも橘のメンソールを攻撃することから始め、あきるまでそこで馬鹿話をしては解散した。一体何の話をしていたのかは、よく覚えてない。

確か、あの当時、グリコ森永事件が世間を賑わしていて、どう考えても担任の佐伯がその指名手配のポスターにそっくりだ、犯人じゃないのかと校内で盛り上がっていた。誰か警察に通報しないかと密かに期待していたが、どうなっ

たのだろう。犯人は捕まらぬまま時効を迎えた今、相変わらず謎のままだが。

「あーいう風にさ」と松田がぼんやり言ったのを覚えている。

その時は、他の二人と別れて、ちょうど俺と松田が家に帰ろうと歩いている時だった。話題は実に最近の犯罪事情。別に社会が悪いとか、どうして減らないのかなどという、真つ当な話とはしていなかった。ただ、俺たちが関心があったのは、平等に訪れるであろう「死」という符号だった。

「もし死んじまったら、一体何人が泣いてくれると思う？」

難しい質問に、俺は「うーん」と唸った。取りあえず無難なところから攻めてみる。

「まずオヤは泣くだろ、間違いなく」

「ああ、それはなー。泣くぐらいしてくれるだろ。俺いい息子だし」

松田は賛同した。

「あとはなあ。お前、姉ちゃんいたろ？家族は泣くだろ、フツウ」

俺は松田を見て言い、「あとはなあ。マキちゃんとか」

正直苦しい。具体的に言おうと思うと出てこず、松田の彼女をとりあえず上げてみた。

「ああ、女は泣いてくれるな。全然話したことなくつても」

松田はうんざりした顔をした。そういえば、最近マキがよく泣いてどうしたらいいかわからないとこぼしていた。

「そんぐらいかあ？」と俺は言う。

「あとは、橘と」

「ああ、橘は号泣だな。小公女セーラで大泣きしたって言ってたしな、あいつ」

松田は思い出して笑っていた。

小学校の隣の駄菓子屋を通りすぎ、大きな白樺の木の向こうに松田の家が見えてきていた。

雲が出てきていて、そういえば天気予報で雨だ

と言っていたなとぼんやり俺は思った。

「お前は？」

と、急に松田は言った。

「あ？」

「お前は泣いてくれねえの？」

松田が俺を見ていた。今まで笑っていた軽い話題だったのに、急に重苦しい空気が漂った。気持ちが悪かった。

「泣くんじゃねーの？」

「なんじゃその疑問形は」

「縁起でもねえよ」と俺は言い放った。「ぼっかじゃねえの」

俺は苛々して言った。何急にマジになってるんだ、こいつ。

家に着いたから松田は立ち止まったが、俺は何だか腹が立ったので挨拶も交わさず無視して歩き続けた。

「よう、明日全校集会あつて30分はえーからな。忘れんなよ！」

後ろから声が聞こえた。俺は振り返らず、
「うっせーんだよ、ばーか」と返してやった。
「じゃあな！」と声がして、松田が家に入って
いく音を聞いた。俺はふと立ち止まって振り返
る。

なあ、死んじゃったら俺のために何人泣いて
くれるんだろうな。

俺は自分のことで考えてみたが、情けないこ
とに片手だけで事が済んでしまった。

何だかその頃の俺達は、ひどく暇だった。

予定といえば、高校受験があって、来年には
高校生になっているだろうというだけだった。

将来の夢もなければ、悩みも大してなかった。
とにかくいつも暇で暇でしようがないから、皆
で馬鹿話をしていただけだった。この中の一人で
も自分の夢を語るような人間がいたり、部活動
に取り組んだり、すげー好きな女がいたりした
ら、もしかしたら何か未来が変わっていたかも

しれなかった。

松田と俺達の。

しかし、何度考えても俺に落ち度はなかったし、小林にも橋にも悪いところはなかった。何度あの日のことをやり直せるとしても、俺達は同じ会話をしただろうし、きっと同じように松田はしたと思う。

そして結果も、同じだったと思う。

「なあ、ここから飛び降りたら死ぬかな」

屋上にはフェンスがなかったから、見晴らしはとてもよかった。ただ、俺達はそこで煙草なんどをふかしていたわけで、しかもそこが出入り禁止となれば、貯水槽の影からあまり動くことなどなかった。ただ、その日はたまたま松田がふらふらと歩いて行って、そおっと屋上から見下ろしていたのだった。

「死ぬんじゃない？だって4階ぐらいあんだろ？」

小林が眉間に皺を寄せて、へっぴり腰で松田

の隣にいた。

「確かさ、1階分って3メートルあるって言うてなかったけ？」と橘。

「言ってたって誰が？」

「佐伯じゃなかったっけ？え、言っただけじゃなかった？誰も聞いたことない？」

橘はうつぶせで松田の隣にいて、同じく見下ろしていた。怖いからというより、下から見られてバレるのが嫌なのだろう。こういうことは橘は慎重なのだ。

「いつ、どうしてそんな話題が授業で出てくんだよ」

俺が突っ込むと、桜井は聞いてるようで聞いてねえからなと他の二人が笑っていた。

「あー？なんだあ？」

俺が腹を立てながらも、貯水槽の影から動かないでいると、松田がこちらを振り返る。

「なあ、桜井はどう思う？」

「なにが？」

「だから、ここから落ちたら死ぬかな、って話」
俺はちよつと前に松田と話したことを思い出したから、不愉快になった。

「おい、マジで死ぬ気じゃねーだろうなあ？」
すると、小林と橘はびつくりして、俺と松田を交互に見ていたが、松田の方はきよとんとこちらを見ていた。「死ぬって、何それ」

「あーほら、前によお。死んだら何人泣くかって・・・」

「あー。あー、そうだ、そんなこと話してたっけなあ。橘がハナ垂らして号泣は確実とか！」
いや、メインはそこじゃねえだろ。

「何、俺の話？」

橘は松田を見上げた。

「そうそう、お前小公女セーラで大泣きしただろ？」

だから、それはメインじゃねえよ。マジで忘れてたのか？

ちよつと真剣にセンチな気分になった俺が馬

鹿みたいだった。

「おまえ、あの話はすごくいいんだって。見てないのか？」

橘は自分が馬鹿にされたと思つて文句を言つていた。別にホンキで怒つてはいなかった。いつものようにただじやれているだけだ。小林がノツてきて、屋上の端っここで笑いあっている。

「おい、アブねーぞ。つーか、そこで暴れんな、見つかるだろうが！」

俺が銜え煙草で注意しても、小林と橘は全然聞いていなかった。話のきっかけをつくつた松田だけ気づいて笑いながら戻ってきた。

「お前、煙草噛むの癖な」と俺の口元を見て松田は苦笑いをして、隣に座つた。

「覚えてたんだ」とぼそつと言う。

「え、」

「だから、何人泣くかって」

「あー、あれから俺も考えちまつて、おセンチになつてたのよ」

松田が煙草を銜えたので、火をつけてやった。

「あ、エンジェルのライター。お前もう経験アリ？」

ラブホのライターだったのに目敏く気づく。

「実は・・・なーんて、ただ拾っただけ。俺そんなに大人じゃなくなつてねー。好きな女もいねーし」

「やっぱ初めては大事だよな」と松田は笑う。

「まあなあ。初めくらいすげー好きな女とやりたいよな。俺ロマンチストなのよ」

ふうと、煙を吐く。

さっきのことが気になつてた。松田は、本当は死にたがってるんだろうか？何か悩みでもあるんだろうか？

いや、そもそも死にたいと思うってどういう気持ちなんだ？

「飛び降りたって死なねえと思うぜ、俺」

少し声がマジになってしまった。

かっちょわりいと内心焦つてると、「そうか

な」と真剣な声が返ってきた。

「おい、お前な」

睨み付けると、松田は「ただの世間話だろうよ、マジになんな」と嫌な顔をされた。

「さっきの橋の話じゃねえけど、3階プラス屋上だから、約4階分として4掛ける3メートルで、12メートル。二桁は死ぬだろ、フツウ」

俺は厳密なところは良く分らないが、火事場とかで逃げるのに飛び降りて骨折したっていうのを聞いていたので、「頭から落ちりやあな」と反論した。

「この下は芝生だし、飛び降りるときに頭から落ちりや、ぐちゃぐちゃだろうけど、足からジャンプすりや、複雑骨折程度じゃねー？」

「そういうもん？」俺がまともに考えて応えたので、松田は意外だったようだ。

「いや、わかんねーけど」

「でもそうかもなあ」

松田は妙に納得していた。

「じゃあさ、ここから飛び降りたら、中間テストとか中止になると思う？」

実は一週間後が中間試験だった。

「あー。なるだろ。窓から目撃とかされれば、完璧な」

中止というより、延期なんだろうが。と俺が思っているのと、

「俺日本史やばいんだよ」と松田はこっちを見てにやりと笑った。

「なあ、桜井、俺のために2日目の3時間目に飛び降りてくれよ。失敗したら、泣いてやるから」

軽口を叩く松田の頭を俺はゲンコツで本気で殴ってしまった。

それから1週間後の中間テストは散々だった。日本史がやばいと言っていた松田は、本人の宣言どおり赤点を取り、俺はというと全てぎりぎりで抜けた。小林は数学が駄目で、橘だけは進

学を狙っているだけに、クラスで1番の成績だった。

夏休みとなった。

俺達は俄仕込みで塾の夏期コースに参加し、赤点の二人はそれプラス学校での補習授業があった。普通の受験生として通りすぎるだけの夏だと思っていた。

真夏日で、寝苦しい夜に、その連絡は来た。突然だった。

真夜中にベルが鳴り、パタパタと階段を下りる母親の足音を聞いたような気がした。

その時代に携帯などあるはずもなく、子機のある電話ですらあまり普及していなかった。

しばらくして階段を駆け上がる音。

「ユウ」とノックもなしに、ドアが開いた。

「なに？」

寝ぼけ声で聞き返した気がする。以前、祖父の具合が悪くてこれくらいに起されたことがあつ

た。今回もそれだろうと思っていた。「またジイさん？」と呟いたはずだ。

「松田君が」

母親がその名前を夜中に言うのが、気味が悪かった。

一気に目が覚めた。

「なに？」と俺はベッドから跳ね起きて母親の顔を見た。暗くて顔の表情は分らなかったが、言いよどんだ姿が不気味だった。

「なんだよ、はっきり言えよ！」と俺は叫んでいた。

廊下で父親と妹が何の騒ぎ？とドア元に立った時、母の口ははっきりと伝えた。

「松田君、亡くなったって」

頭が真っ白になるってこういうことを言うんだと思った。

・・・意味が分らなかった。

それ以後のことは、あまり記憶にない。

口にもあまり出したくなかったので、話題を避けていた。

あれから五年が経過した今、中学の同窓会があり小林と橘に久しぶりに会った。酒が入ったことで、否応なしにその話題になった。

あの時電話をくれたのは小林の母親で、小林は橘に電話したり、担任に電話したりしたらしい。今更そんな事実を知った。

何で小林がそんなことをしていたのかといえば、夜中に松田とすれ違ったのだそうだ。

「どこで？」

「だから、学校の近くに酒屋あったろ、今はねえけどさー。ほらエロ本の自販機もあったじゃん」

小林は煙草を買うのに、そこを利用していた。以前は未成年者規制で自販機が夜中に使えないということがなかったので、よく夜中に家を抜け出しては煙草を買う奴がいた。小林もその一人だった。

「俺がエロ本も買おうかなとか思ってたらさ。誰かが自転車で抜けていったんだよ。夜中にだぜ？」

それで、何気なく目を向けると、自転車には中学の規定ステツカーが張ってあり、後ろ姿が松田によく似てたそうである。

「何でそんなとき、声掛けないんだよ！」と俺は十年以上昔のことを蒸し返して本気で怒った。すると小林も小林で、本気で言い返してきた。

「確信ねえし、夜中に凄いい勢いで走ってたんだから分るかよ！後で聞いたらあいつの自転車変速つきだったんだぜ、しかも五段階！ムリだろ！」

よくもそこまで覚えているもんだ。俺は忘れたいという思いが強かったのか、あれ以後のことはあまり記憶に残ってない。たった一つを除いて。

「で、その自転車が学校へ入っていくのが見え。別にその時は何か起こるとか思わないしさ。

俺にしてみれば、貴重な小遣いをエロに費やしていいのかどうかっていうほうが、重要だよ」

「それはいいよ、小林。で？」

橘が話しを即す。結局橘も真相を積極的に話題にするのを避けていたクチなのだ。俺達はあまりにも松田の近くにすぎた。今もなお、あいつが死んだとはピンとこない。

「それで、結局エロ本買ってさ。街灯の下でちよつと立ち読みとかしてたわけ。そしたら、どかーんってスゲエ音がしてさ。ほら、車とかが衝突した時みたいな」

「そんな凄い音がしたのか」と橘は少々青くなっていた。

松田は屋上から飛び降りた。俺が言ったとおり足から飛んだらしい。ところが下は芝生ではなかった。自転車置き場の屋根に彼は落ちたのだった。

全身打撲の即死だったそうだ。

「あいつのうちさ。何か離婚のこともめてた

らしいぜ」

小林はビールをあおって、そう締めくくった。誰もがそれで悩んで自殺したと思っただけらしい。小林も橘も例外ではなく。

一応警察が俺達に聞き込みに来ていて、彼らは以前俺と松田が死ぬことについて話していたということを知っていたらしい。俺はその時なんと応えたか、まるで覚えていないが、松田は死にたくて飛び降りたのではないということだけは知っていた。

だって、俺は言ったのだ。きっと死なないと。あいつは飛ぶ方向を間違えたのだ。

街灯がある方向は広い前庭が広がっていたが、校門がまっすぐ見下ろせて地面も煌々と照らされていた。

だから闇に飛んだに違いない。グラウンド方向ではなかったから、そのまま前庭があると思っただけだろう。しかし、駆け足で勢いをつけたために、前庭の奥にある駐輪所の屋根ま

で届いてしまった。

あいつは、きっと両親の関心を自分に向けさせたかったのではないかと思う。自分が大怪我さえすれば、少なくとも離婚どころではないだろうと。

今だから、そう分析できる。

*

俺は松田の通夜に出た。

皆学生服を着て、きちんと整列をし、俺はその列に交じりながら、笑顔の遺影を眺めた。

なんだかギャグみたいだった。ついこの間まで、俺と馬鹿話をしていた奴が、今はこの世にいないくて、もう二度と会うことができなくなって。

なんだそれ。

通夜の最中、俺はずっと遺影を眺め続け、以前あいつが言っていた質問を思い出していた。

俺が死んだら一体何人が泣いてくれるだろう？

俺は遺影から視線を放し、周りを見た。

予想はほぼ当たっていた。家族は泣き、女た

ちも泣いていた。

ただ、橘は号泣どころか全く涙を流していなかった。小林も同様。俺も同様だった。

視線が合った時、「これってなに？何の冗談？」という表情だった。しかし、それも一瞬で、三人とも視線をそれ以上合わせるのを避けていた。会話も避けていた。

俺達は何かが通じてしまうのを恐れていた。

*

俺は屋上にフェンスや新しい南京錠が取り付けられる前に一度一人でそこへ行った。

松田が死んで3日後だったと思う。

飛んだと思われるところには、花束があった。

そして、あいつがよく売店で買っていたカツゲンとやきそばパンも置いてあった。

俺はそれを一瞥だけして、いつもの貯水タンクの裏に行った。

いつも通り座って煙草に火をつけたときに、ふと吸殻が目に入った。

ショートホープだった。

俺はそれを摘んで、思わず笑った。

「お前だって噛んでんじゃん」

細く短い煙草の口の端は、噛み潰されていた。

俺は松田がいつもはこんな吸い方をしないことを知っていた。

なあ、俺が死んじまったら

何人が俺のために

泣いてくれるんだろうな。

ふと、思い出した。

煙草が口から滑り落ち、コンクリートの上で

火の粉が跳ねた。

俺は膝を抱えた。

泣いてしまった。

松田の為だったのかどうかは分らない。理由なんて知るか。ただ涙が止まらなかった。

人が死んで、これほど泣いたことはない。

なのであいつは、間違っただけで死んでしまったんだらう。

なんであいつは、高校に行けないんだらう。

あいつが死んで俺が死なない違いって一体何なんだらう。

今だに俺は分らないけど、たまに松田を思い出すと、いつも少し泣いてしまう。そして次の瞬間笑ってしまう。

ばーか、マジになっただけじゃねーよ。

俺の中の松田はそう言っただけで最期には笑っていった。

了